

学生海外調査研究	
中国と日本の律令国家における「外国人」についての現地調査に基づく比較研究	
高 丹丹	比較社会文化学専攻
期間	2013年 9月 7日～ 2013年 9月 21日
場所	中国（北京、西安、洛陽）
施設	大唐西市博物館、陝西歴史博物館、西安博物院、西安碑林博物館、洛陽古代芸術博物館（旧洛陽古墓博物館）、洛陽博物館、洛陽碑誌拓片博物館、洛陽驛站博物館・古唐寺、北京大学、中国社会科学院、中国国家博物館、中国国家図書館

内容報告

1. 海外調査研究の必要性と目的

報告者は、国際交流と律令国家形成の中で大きな影響力を持った「外国人」という視点から日唐比較研究を博士論文のテーマとして研究している。具体的には、変化する国際関係の下での「外国人」の生涯、律令国家の「外国人」への認識・管理、「外国人」に開放された領域について研究を行っている。

日中文化交流について、唐と日本の律令の比較研究を行うことは従来の研究で注目されてきた。令の作用とは国家の基本制度を定めることにあり、この令を学んだことは日本にとって大きな出来事であった。日唐律令の比較研究は、隋唐時代の中国、日本律令制国家の創立と形成及び日唐文化交流を研究するにあたり、重要な意味がある。1999年、中国浙江省寧波市の天一閣博物館所蔵で北宋「天聖令」の存在が公表されたことは、律令の研究にとって画期的なことである¹。

卒業論文では、百済における熊津都督府を中心に七世紀東アジア地域の国際情勢について研究を行った。七世紀東アジア構造における日唐関係において、熊津都督府が重要な役割を果たしていたことを指摘した。また、唐朝の律令制度が周辺国家に浸透していったこと、特に白村江の戦いのあと日本に大きな影響を与えたことに注目した。修士課程に進学した後も律令制国家に関心を持ち、特に文化交流における制度の重要性を意識するようになった。法制度を整えた唐朝は、周辺国家が競って学習し模倣する対象となり、政治・社会の発展と変化に重要な影響を与えた。なかでも日本の受けた影響は突出している。

2009年11月に、報告者は国立台湾大学で行った「日中文化交流史—日唐令比較研究—」研討会において、「唐令から見た唐代の内附の民に対する政策」という報告を行い、天聖令の発見によって新たにわかった唐賦役令にみえる「外国人」に対する管理規定と実際の政策について明らかにした。

この研究を進める上で、日唐の「外国人」に対する政策の具体的な執行状況の異同、律令国家において「外国人」がどのようにイメージされ、さらにそのイメージがどのように形成されたか、彼らの異国における命運、変化する国際関係の下でどのような人生を送ったのかなどについて解明する必要がある。その中で、日本の律令国家のモデルとなった唐王朝の状況を詳細に把握しなければならない。その上で、日唐の「外国人」の共通点と差異を明らかにする。

唐代の「外国人」に関する資料は、文献史料だけではなく、墓誌・碑銘など石刻、壁画、遺物など出土したのも貴重な史料となる。唐代の国際都市としての首都長安と東都洛陽（現在の西安と洛陽）は阿倍仲麻呂・井真成・円仁等の人物と各国からの「外国人」が活躍した地域であるため、このような史料の集中地といえる。したがって、長安と洛陽における「外国人」の生活環境・状況などに関する遺跡・遺物を自身で調査しなければならない。その生涯・境遇に関する中国にしかない石刻・壁画・文献史料や最新の考古資料のデータの収集・検討することが必須である。

そこで、今回の海外調査研究では、唐代の中国における「外国人」の生活環境・商業活動・生涯・境遇・イメージなどを明らかにするため、西安・洛陽にある唐代の国際貿易を行った場所である長安西市遺址と中国で亡くなった「外国人」の埋葬地の現地調査を行い、中国で出土した遺物・石刻・壁画・文献史料等の収集を行った。また、史料収集だけではなく、現在中国の首都としての北京にある中国史の先端的研究を行う中国社会科学院・北京大学への訪問も予定し、中国の律令制研究と国際関

係研究の専門家と面会し、研究手法や情報などを学ぶことも今回の調査の目的とした。

2. 調査の内容

2.1 西安における調査研究

西安市では、隋唐の西市遺址の遺跡と遺物などの現地調査を行い、陝西歴史博物館・西安博物院・西安碑林博物館に収蔵された「外国人」に関する資料を収集した。

2.1.1 大唐西市博物館（西市遺跡）

唐代の西市は長安の皇城の南西に位置して、長安城の西側にある開遠門と近い、唐代の国際貿易を行った場所である。隋の開皇年間から、唐末の破壊まで、三百年以上の繁栄を維持した。シルクロードの西端の出発点として、隋唐時代の西市には中国の対外貿易が集中し、たくさんの外国人が西市で活躍した。西市遺跡は南北 1031 メートル、東西 927 メートルの長方形を呈して、市内では東、南、西、北の四つの大街があって、幅が約 16 メートルで、「井」の形であった。現在、その遺跡の上で、大唐西市博物館が建てられた。館内で、発掘された北東「十字街」遺跡、その北側にある石板橋遺跡、排水溝遺跡、道路と轍遺跡、井戸遺跡などを見学できた。「外国人」の生活・活動の空間の一部を認識できた。また、一部の西市遺跡で出土した遺物と館蔵の文物を展示して、当時の人々の商業活動・生活に関するもの、外国商人のイメージが表現されたもの、国際交流を提示できたものなどがよく見える。

また、近年、大唐西市博物館は歴代の石碑・墓誌など約 950 点を収集した。時代は北朝から明清までにわたっていたが、唐代のものは一番多い。その中で、約 500 点の墓誌は整理・出版された²。今年、「貞石千秋—大唐西市博物館珍藏墓誌展—」という特設展覧があるが、個人では入ることができない警備の厳しい地下蔵庫に展示されていたため、予約および別料金の支払いをした上で、スタッフの案内を受けながら見学する必要があった。展示されていた約 100 点の原石とその拓本は、「外国人」に関するものもあった。例えば、百済人の陳法子の墓誌に、陳氏は唐軍が百済を滅ぼしたために入唐し、唐王朝の官僚になって、唐の領域に住んでいたなどと記載された。彼は「外国人」であったものの、墓誌には「今為洛陽人」という認識が見られた。これは変化する国際関係の下で「外国人」の異国の人生、認識などの研究にとって、貴重な史料になった。

2.1.2 陝西歴史博物館

陝西歴史博物館は、陝西省で出土した文物の絶品をたくさん収蔵している。常設陳列は史前から清代までの七部分において陝西の歴史と文化を集中的に反映している。また、「シルクロード：起始段と天山廊道の路網—中国部分專題陳列—」と「大唐遺宝—何家村窖藏出土文物展—」という特別展示もあった。展示された多数の唐代の遺物は、国際的な大都市としての長安が世界の物産・文化の合流・交流地になって、繁栄を極めた光景をみごとに表現していた。遺物の中には、多国の「外国人」の姿が見える。特に唐三彩や陶俑の「胡商」が駱駝を引っ張った造形は多数あったが、表情や動作などはさまざまであった。また、各種の遺物で、「外国人」が騎馬、狩猟、演奏などの姿もあった。

なお、陝西歴史博物館の唐代陵墓の壁画真品はとても貴重な宝物である。国宝のレベルのものは数件があった。その中で、「外国人」の姿が現れた有名な壁画は章懐太子墓の墓道の東、西壁から出土した「客使図」である。これは「礼賓図」・「迎賓図」ともいえる。東壁の「客使図」には、六人の前に立った三人が唐の官僚の衣服をして、使者を迎える唐の人物であり、他の三人は蕃使とみられるが、その出身国はそれぞれ異なる。第一番目の蕃使は東ローマ使節の説、ペルシャ使節の説および景教徒の説があった。第二番目の蕃使も日本の使節や新羅の使節や渤海の使節や三つの説があった。第三番目の蕃使は東北少数民族、室韋あるいは靺鞨の使節という意見を持っている人が多い³。これは、「外国人」に対する管理、「外国人」のイメージなどの研究にとって、重要な史料である。また、これと梁の「職貢図」と比較すると、外国の使節のイメージの形成など問題について、今後の検討でより深い認識を期待できる。

2.1.3 西安博物院（博物館・薦福寺・小雁塔）

西安博物院は博物館・薦福寺・小雁塔の三つの部分がある。博物館は西安の歴史と文化を中心として文物を展示しており、西安にある歴代の都城の発展史を見ることができた。さらに、長安城の国際的な光景を呈した中外交流の遺物と「外国人」の姿を現れた遺物も陳列されていた。

薦福寺は唐の皇室の親族は高宗のために建立した寺である。唐代の僧侶の義浄が仏經を翻訳した場所として有名である。また、西域の康居国の法藏、于闐の実叉難陀、中天竺国の王子の金剛智、日本の僧侶の円仁、葱嶺北何国の僧伽、北天竺国の不空など外国からの高僧も薦福寺に滞在、あるいは活動していたため、宗教的な国際交流、さらに唐代の「外国人」の活動の空間として捉えられていた。現在の薦福寺の建築群は明・清時代のものである。

小雁塔は唐代の薦福寺の仏塔で、景龍年間に築造され、大雁塔とともに現存する数少ない唐代長安

城の建築である。小雁塔は本来に方形の密檐式 15 重の磚塔であり、数十回の地震のため、13 重が残っているが、唐代の建築の美しさを窺うことができた。

2.1.4 西安碑林博物館

西安碑林は北宋の元祐二年（1087）に建てられ、漢代以来の歴代石碑・墓誌など 3000 余点を保存しているところである。現在、西安碑林博物館は孔廟・碑林・石刻芸術室の三部分からなっており、一万点以上の文化財が収蔵された。西安碑林は中国において古代石碑が最も多く収蔵されている場所であり、古代の書道芸術の宝庫と称される。また、中外の文化交流の歴史も反映されている。例えば、第二室に陳列された「大秦景教流行中国碑」、「広智三蔵和尚碑」（「不空和尚碑」）、「梵漢合文陀羅尼真言經幢」などは、中国と外国の文化交流、「外国人」が唐の領域内の宗教活動などを研究する上で貴重な資料である。なお、元々西安の鐘樓にあった唐景雲鐘など遺物、および太宗の昭陵にあった「昭陵六駿」の四駿（ほかの二駿はアメリカにある）など石刻もここで保存され、唐代の芸術の上級性と文化の発達などが確認できた。

2.2 洛陽における調査研究

洛陽では、北邙山のあたりにある洛陽古代芸術博物館（旧洛陽古墓博物館）で現地調査を行い、洛陽博物館、洛陽碑誌拓片博物館、洛陽驛站博物館にある文物と石碑、墓誌、壁画など資料を収集した。

2.2.1 洛陽古代芸術博物館（旧洛陽古墓博物館）

北邙山は商代から歴代の有名な埋葬地になった。帝王から、貴族、官僚、有名人などたくさんの人が北邙山を埋葬地として選んだ。唐代の詩人王建は「北邙山頭少閑土、尽是洛陽人旧墓」⁴、白居易は「何事不随東洛水、誰家又葬北邙山」⁵ という名句があった。北邙山の陵墓群の規模が想見できる。その中で、高句麗・百濟からの移民も北邙山に埋葬された人が多く、例えば、高句麗人の泉男生・泉男産・泉献誠・泉恣など⁶、百濟人の扶余隆・黒齒常之・黒齒俊など⁷、さらに家族墓群になった場合もあった。しかし、洛陽の盗掘が従来から続いているため、たくさんの墓誌の詳しい出土が不明になって、文献により簡略的な地点の記録しかなかった。そのために、墓誌はあるものの墓自体の所在が明らかでない場合が多い。また、発掘された陵墓はすべて開放されているのではなく、保護のために埋め戻すこともよくある。

そこで、洛陽の北郊の北邙山地域にある洛陽古代芸術博物館（古墓博物館）は歴代の墓葬内部空間、中国古代の墓の形の発展、墓葬文化の比較を考える上での参考になった。洛陽古代芸術博物館は旧名が示す通り、洛陽周辺、主な北邙山陵墓群から発掘された墓葬を集めた博物館である。展示区は前漢から歴代の典型墓葬区、北魏の宣武帝の景陵がある帝王陵墓区、壁画館の三つの部分から構成されていた。歴代の典型墓葬区は地下展厅にあって、その墓葬の内部が移築展示されている。その中で、「外国人」として西域安国人の安菩夫婦の墓を展示された。安菩は入唐の移民として唐の将軍になったが、胡人の身分を示したこと、元々の祇教信仰を維持したことは墓の内部空間の設置や、図案や、随葬品などから解明できた⁸。異国で、出身国の文化の継続も「外国人」の生活の一部であったことが分かった。

また、壁画館に展示された唐代安国相王孺人唐氏・崔氏壁画墓などの墓道壁画に胡人が駱駝や馬を引っ張っていた造形が多い。その一つの絵に胡服や、胡服と漢服をミックスしていた胡人がそれぞれいた。唐代の壁画にある胡人が主人に奉仕していた家奴の姿であることもこの展示から分かった。

2.2.2 洛陽博物館

今回訪れた洛陽博物館は 2011 年 4 月に正式開館された新館であり、建物の規模が大きい博物館である。基本陳列展は史前、夏商周、漢魏、隋唐と五代北宋時期の五つの部分に分かれ、洛陽に都が置かれた時代の河洛文化の形成と発展を展示していた。専題陳列は洛陽珍宝、漢唐陶俑、唐三彩、古代石刻、宮廷文物、書画館などの展示が行われていた。展示物の胡人俑で、牽駝・馬の胡人は多数あったため、これは唐代の胡人の主なイメージの一つと推定できた。

また、「洛陽とシルクロード」という特設展示会も行われていた。展示物の中で、2006 年洛陽に出土した「大秦景教經幢」があって、景教の唐代の流行や、図案から見た異文化の交流を窺うことができた。洛陽がシルクロードの東部出発点となった証拠もいえる。

2.2.3 洛陽碑誌拓片博物館

洛陽碑誌拓片博物館は民間会社の社長によって創立され、洛陽の中心地のデパートの三階にある小さい博物館である。漢魏から明・清時代まで、個人のコレクションの一部を展示しており、気に入ったものがあれば販売しているようである。拓本だけでなく墓誌も並んでいたが、全部本物かどうか疑問を持っている。蔵品の目録や、図録などがまだ発刊されていなかったため、展示されていない所蔵品については情報が得られなかった。また、個人の収蔵品を利用する際に本物が偽物か十分検討する必要がある。

2.2.4 洛陽驛站博物館・古唐寺

洛陽驛站博物館も民間会社により成立されたものであり、「周南駅」という高級なレストランと一体となった。実は、昼食・夕食の時間帯には、食事客でなければ入館できなかつた。インターネットやガイドブックに載っていた遺物も見ることができなかつた。また、駅に関係する希少な複製品もレストランを着飾るために設置されようになつたのが残念と感じる。

その代わりに、洛陽城の北東に位置しており、今は昔ながらの村の中である古唐寺に向かつていた。古唐寺はもとを大福先寺といい、唐代創建である。そして、733年の遣唐使で洛陽に到来した栄叡と普照が道璿と出会い、道璿来日の契機となつた場所である。また、唐代にインドの僧侶もここで宗教活動を行った。「外国人」と文化交流と関係ある場所として、重要な意味を持つ。古唐寺は洛河の洪水により明代に移転したが、大きくは変わっていない。現在の建物は民国の修復である。地上に残る遺跡が少ない洛陽では、民国時期といえども貴重な遺構である。

2.3 北京における調査研究

北京市では、中国史の先端的研究を行う北京大学・中国社会科学院・中国国家博物館・中国国家図書館に行き、史料の収集を行い、中国の律令制研究と国際関係研究の専門家と面会して、勉強になつた。

2.3.1 北京大学

北京大学では、付属の「賽克勒考古と芸術博物館」に行き、北京大学の考古文博院が収蔵した中国各時代の遺物の展示を見て、さらに豚についての特設展示会を見学できた。

また、北京大学歴史系の唐代の国際関係史の専門家の王小甫先生の「隋唐史研究」のゼミに参加させていただき、学問のやり方や、先生の近年の研究状況や、研究の視角などを提示された。王先生は近年、「中国中古の族群凝聚」という研究をして、連想の学習方法や、世界史・辺縁史の視角・理論などを指摘していた。自身の変化する国際関係下の「外国人」の研究にとって、方法や理論上の啓発があった。なお、北京大学の図書館には多くの唐代に関する資料があり、貴重な資料を得ることができた。

2.3.2 中国社会科学院

中国社会科学院では、中国の律令制研究の専門家の黄正建先生や、李錦綉先生や、牛来穎先生や、孟彦弘先生や、雷聞先生などに面会でき、律令制・国際関係など研究に関する指導をいただき、さらに、中国社会科学院の付属図書館を案内してもらい、数多くの貴重書籍を見させていただいて、非常に勉強になつた。

2.3.3 中国国家博物館

中国国家博物館は天安門広場の東側に位置し、立派な規模を持った博物館であり、中国各地から出土した貴重な遺物が展示されていた。「外国人」については、牽駝・馬の胡人や胡商など俑がもちろんあり、崑崙人の陶俑や、「持壺大食人黄釉陶俑」など造形もあつた。さらに、ここでは、ペルシャ人の阿罗憾、苏涼妻马氏などの墓誌拓本が収蔵され、敦煌・トルファンで出土した文書や、『大唐西域記』の写本なども展示されていた。なお、唐代の遺物から、その時代の「外国人」だけではなく、古代中国における人々の生活の一端を窺うことができた。自身の研究にとって、貴重な史料を収集した。

2.3.4 中国国家図書館

中国国家図書館は中国の図書総庫、古籍の保護中心である。一つの残念なことは総館の南区が工事中であり、敦煌・トルファン文書など史料を見ることができなかつたが、自身の研究に関する多数の文献史料や貴重な情報を得ることができた。

3. 今後の研究計画

今回の海外調査研究では、日唐の「外国人」に対する政策の具体的な執行状況の異同・「外国人」のイメージとその経緯の検討を行うため、西安・洛陽と北京における遺跡の現地調査と遺物・石刻・壁画・文献資料収集を行うことができ、多くのデータを得ることができた。今後はこの海外調査研究で集めた資料をまとめ、唐代の中国における「外国人」の生活環境・商業活動・生涯・境遇・イメージなどを解明していく。さらに、日本の律令国家における「外国人」と関係ある遺跡の現地調査や、遺物・文献資料の収集を行っていく。日唐の両方の状況をとともに把握の上で、比較研究を行い、古代日本および唐代の国際交流と律令国家形成の中で大きな影響力を持った「外国人」のそれぞれの特質・意義を明らかにしていく。それらの検討をした上で、「外国人」を「中心」と「辺縁」を分けて考察を進めていき、博士論文の肝心な部分を作成していく。

また、今回は中国の先端的な機構の研究者と交流でき、指導をいただき、中国の学術界だけではなく、世界の学術界の情報も入手できた。今回の海外調査研究には、国際的な女性リーダーの育成という目的も含まれていた。その旨を達成するために、今後には自身の視野を広げる必要がある。特に国際

関係に関わるテーマについて、世界史の視点を養成するとともに欧米の学术界の情報にも注目し、そして自身の理論的なレベルを高めていく。その上で、博士論文の理論の部分完成していく。

注

1. 天一閣博物館・中国社会科学院歴史研究所天聖令整理課題組（2006）『天一閣藏明鈔本天聖令校証』上・下冊、中華書局
2. 胡戟・榮新江主編（2012）『大唐西市博物館藏墓誌』上中下三冊、北京大学出版社
3. 申秦雁主編（2006）『神韻與輝煌—陝西歷史博物館國寶鑒賞・唐墓壁畫卷一』三秦出版社、150
4. 王建（唐）「北邙行」『全唐詩』卷二九八
5. 白居易（唐）「清明日登老君閣望洛城、贈韓道士」『全唐詩』卷四五六
6. 栢根興（2013）「入唐高麗移民墓誌及其史料価値」『陝西師範大学学报』42（2）、159-165
7. 董延壽・趙振華（2007）「洛陽・魯山・西安出土の唐代百濟人墓誌探索」『東北史地』2、2-12
8. 沈睿文（2009）「重詠安菩墓」『故宮博物院院刊』4、6-21

こう たんたん／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

高丹丹さんは、律令制下の外国人に関する日唐比較研究を博士論文で執筆中です。日本が律令国家を形成する上で、外国人（渡来人）の果たした役割の大きさは言うまでもありません。日本の律令における外国人についての規定は、唐律令を模したものです。近年中国で発見された北宋天聖令には、唐令も含まれており、従来知られていなかった外国人に関する規定も多数見つかりました。また現在、中国では、外国人が多く居住した唐の都長安や洛陽から、新たに墓誌や壁画などが続々と発見されている状況にあります。今回の海外調査で、これらの新しい史料・資料を収集することができたことにより、高さんが唐代の外国人について従来とは異なる新しい見解を導き出すことが望まれます。

さらに、今回の調査の一環で、北京の中国社会科学院歴史研究所や北京大学等の研究者と交流することによって、最新の研究成果を入手できたことも大きな意味を持っています。これらの成果を元に、日本古代の外国人との比較研究が進捗し、博士論文に活かされることを期待しています。

（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科（文化科学系）・古瀬奈津子）

A Field Investigation Report of “Foreigners” in Ancient Eastern Asian Precept States

Dandan Gao

This field investigation is a part of the comparative study of the foreigners in Precept States of ancient China and Japan. There are many historical remains and unearthed relics in Xi'an and Luoyang, which were the capital and the second capital of China in Tang Dynasty. By investigating the historic sites and collecting historical information in these two cities, the careers, commercial and religious activities, circumstances, and images of the foreigners in Tang China could be traced. The data concerning foreigners in Tang China was also collected in Beijing, where an extensive literature and historical materials could be found.